

ZOCALO 2020 8 ▶ 9

ZOCALO = ソカロはメキシコの都市の広場を意味するスペイン語。埼玉県立近代美術館はアートを通して交流する市民の広場をめざしています。

Reschedule

今年度の新しいスケジュールをご案内します。

企画展

New Photographic Objects 写真と映像の物質性

6月2日[火] ~ 9月6日[日]
一般1100円(880円) 大高生880円(710円)
()内は団体料金

会期を延長して開催中!



展示会の詳細は、裏面をご覧ください。

MEDE SUWARU

— 今日みられる椅子

9月26日[土] ~ 11月3日[火・祝]
観覧無料

当館では、館内各所でグッドデザインの椅子を展示してきましたが、新型コロナウイルス感染防止のため、当面の間、座れる椅子の展示を制限しています。そこで、実際に座るかわりに椅子をじっくり見る、つまり、「目で座る」展示会を開催します。

どこに置きたい? どんな座り心地? など、椅子のかたちや色、素材を見ながら自由に想像して、「愛でる」楽しみを見つけてみませんか。



アルヴァ・アールト
(バイミオ/アームチェア 41)
デザイン:1930-31年/製品化:1932年

上田 薫

11月14日[土・県民の日] ~ 1月11日[月・祝]
一般1100円(880円) 大高生880円(710円)

上田薫(1928~)は、殻からつりと落ちる生卵、スプーンから流れ落ちそうなジャム、水の流れや空など、一瞬で姿を変えるものを清新な描写で捉えます。

リアリズム絵画のなかに独自の位置を占めるその画業を、基点となる1970年代半ばから現在までの作品でたどります。



上田薫《なま玉子A》1975年
群馬県立近代美術館蔵

コレクション 4つの水紋

1月23日[土] ~ 3月21日[日]
一般1000円(800円) 大高生800円(640円)

本展では、埼玉県ゆかりの日本画家奥原晴湖など、当館が収蔵する4作家を起点として、それぞれの生きた時代や確立した画風などの特徴をキーワードに、コレクションを幅広くご紹介いたします。

コレクションを通して、時代や地域、ジャンルを超えた思いがけない作品同士のゆるやかなつながりをお楽しみいただけます。



奥原晴湖《仙境群鶴》1905年

※ 当初予定していた「桃源郷通行許可証」、「美男におわす」、「ボイス+パレルモ展」は、来年度以降の開催を検討中です。

MOMAS コレクション

第2期 7月18日[土] ~ 10月18日[日]

◇セレクション

◇異界/異形のコスモロジー

展示会の詳細は、裏面をご覧ください。

第3期 10月24日[土] ~ 2月7日[日]

◇セレクション

◇花鳥を描く

◇アーティスト・プロジェクト #2.05 スクリプカリウ落合安奈
Blessing beyond the borders—越境する祝福—

第4期 2月13日[土] ~ 4月18日[日]

◇セレクション

◇「MOMASのとびら」のむこうがわ

◇日本画の視点

◇リサーチ・プログラム: 関根伸夫と環境美術

特集: コロナ禍により会期中途中で閉幕した展示

企画展「森田恒友展」

MOMAS コレクション第4期

「春陽会一旗揚げのころ」

「森田恒友展」は、埼玉県熊谷市に生まれた画家・森田恒友(1881~1933)の画業をたどる、久しぶりの回顧展として開催されました。洋画、日本画、スケッチブック、雑誌など、約250点を展示しましたが、日本画は作品保存の観点から、会期中途中で一部展示替を行い、前期(2月1日~3月1日)と後期(3月3日~3月22日)に分けてご紹介する予定でした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、2月29日から臨時休館となり、3月2日に予定通りに展示替作業を行いました。結局、最終日まで再び開館することは叶いませんでした。後期展示は、一度もご覧いただけることなく終了してしまっただけです。そこで、後期で初公開を予定していた面白い日本画《淀川沿いの街道》をご紹介したいと思います。

恒友は1911(明治44)年から翌年にかけて、大阪の新聞社に勤め、新聞に政治や人々の生活を題材にした漫画を描いていました。この時期に制作された《淀川沿いの街道》では、人物が川沿いを自転車で走る様子が、ゆるやかな線で飄々と描かれています。川沿いには電線が、遠景には土地が見え、人物は向こう側からずっと自転車を漕いできたと想像されます。手前の二羽の鳥は自転車を避けて、あわてて画面の外へ逃げているようです(一羽は画面から半分切れていますね)。新聞社の仕事にも通じる漫画の一コマのようなこの作品には、縦長の画面を生かして、日常の一場面をさりりと切り取る恒友のセンスが感じられます。

加えて後期展示では、ちょうど春めいてくる時期でしたので、晩年の日本画《田園の春》など、季節に合った作品もご紹介する予定でした。晩年の日本画に見られる淡い緑の繊細さや、人物の表情の愛らしさ、そして、恒友が四季折々の自然と人々に向けた温かな眼差しをぜひ感じていただきたかったので、会期中途中で



森田恒友《淀川沿いの街道》1912年 個人蔵

閉幕はとても残念でした。いつかまた、恒友の作品をまとめて展示できる機会があればと思います。

また、「森田恒友展」に関連して、MOMAS コレクション第4期では恒友が結成に関わった美術団体「春陽会」を特集しました。春陽会は、岸田劉生を中心とする草土社と、明治後期の美術雑誌『方寸』の同人が多く参加した再興院展洋画部という、大正期の2つのグループを主要な母体として結成されました。恒友展と併せてご覧いただくことによって、こうした画家同士のネットワークも感じていただきたいと思います。展示を構成しました。

展示では、関連作家の作品に加えて、会報誌『春陽会雑報』をはじめ、活動の様子が分かるような関連資料も紹介しました。2013年の「たまもの 埼玉県立近代美術館大コレクション展」以来久しぶりの展示となった倉田白羊旧蔵資料は特に反響がありました。会員に向けて貼り出されたと推測される手書きの掲示物を壁に展示してみると、当時の会の賑やかな雰囲気がたちあがってきたことが印象に残っています。(Y.T./S.H.)

MOMAS コレクション第4期

「サポーターズ・チョイス！」

『サポーターズ・チョイス!』は、今年で活動20周年を迎える当館のガイドボランティア「美術館サポーター」のアイディアを取り入れた展示です。サポーターの美術についての知見とガイドでの経験を反映させた本企画は、昨年の6月末から開幕直前まで議論と調整を続けながら、普段とは一風変わった展示を完成させました。人物に関する作品のコーナー、線の造形に注目したコーナー、言葉の投げかけを起点として作品を鑑賞するコーナー、ガイドの思い出を振り返るコーナーの全4コーナーで展示を構成し、公開できなかった後期展示では、まどろむ女性の後ろ姿を描いた伊東深水《宵》(1933年)や日本画の素養



森田恒友《田園の春》1926-27年頃 個人蔵



「春陽会一旗揚げのころ」展示風景

を活かした粋なデザインで知られる小村雪岱の《おせん》(1941年頃)、今にも鶏の鳴き声が聞こえてきそうな小茂田青樹《鳴鶏》(1930年)をご紹介する予定でした。

サポーターによる毎日14時からの作品解説ガイドがこの展示の鑑賞体験をより充実させるはずでしたが、コロナ禍から2月末に臨時休館となり、ガイドの再開はおろか展示そのものがそのまま閉幕を迎えてしまいました。作品と来館者との新たな出会いの機会が失われてしまったこと、そして、サポーターの皆様の半年間にわたる努力と献身を思うと、会期を完走できなかったことが本当に無念でなりません。

本企画は作品展示に関する事業である一方で、ボランティアスタッフを中心とした企画であることから、当館と地域との共生を目指す教育普及事業の側面も持っていました。来館者とのコミュニケーションの最前線に立つ美術館サポーターは、美術館と地域とのあわいに位置すると同時に、自身も地域に根差しながら日常を営む存在です。地域の人々の意見をどう取り入れ、どう共に歩いていくかが昨今の日本の公立美術館における1つの課題とされているなかで、サポーターの皆様と「お客様にとっての最善」の展示や鑑賞の方法を一緒に考えることができたことは、当館にとって非常に大きな収穫でした。そう考えると、地域と共に当館を成長させていく活動に終わりはなく、本企画は今後当館で走り始めるだろうそのような活動のための新たな道標を生み出すものであったといえます。

最後となりましたが、本企画にご協力くださった美術館サポーターの皆様にお礼を申し上げます。五里霧中のなか、展示をかたちにすることができたのは皆様のお力添えのおかげです。約半年間、本当にありがとうございました。(K.H.)



「サポーターズ・チョイス!」展示風景①



「サポーターズ・チョイス!」展示風景②
線のコーナーでは作品を虫眼鏡で見ることができるようになりました。